

観光・郷土史・「偽史」

——一九三〇年代青森県三戸郡戸来村「キリスト湧説」の位相——

川内 淳史

はじめに

青森県三戸郡新郷村は、八戸市から車で一時間ほどの場所にある、人口二千名ほどの小村である。村内を走る国道四五四号線を西に向かうと



図1 キリストの墓 (奥が「十来塚」、手前が「十代塚」)

十和田湖に行き着く風光明媚な山村であり、かつては酪農や林業が盛んに行われ、現在も住民の四割以上が第一次産業に従事している。同村の中心地区である戸来地区は、鎌倉期にはすでに「へらいのかう」（戸来郷）として見え、戦国期より三戸南部氏の支配下に入り、近世を通じて「戸来村」は戸来氏の知行地であった。町村制施行後は、近世村である戸来村がそのまま

行政村となり、のち昭和三十年（一九五五）に隣村の野沢村の大字西越と合併、現在の新郷村となる。¹⁾

この新郷村には、毎年各地から多くの観光客が訪れる有名な観光資源が存在する。「キリストの墓」である（図1）。「キリストの墓」について、新郷村のホームページでは次のような紹介がなされている。

「ゴルゴダの丘で磔刑になったキリストが実は密かに日本に渡っていた」

そんな突拍子もない仮説が、茨城県磯原町（現北茨城市）にある皇祖大神宮の竹内家に伝わる竹内古文書から出てきたのが昭和十年のことです。竹内氏自らこの新郷村を訪れ、キリストの墓を発見しました。一九三六年に考古学者の団が「キリストの遺書」を発見したり、考古学・地質学者の山根キク氏の著書でとりあげられたりして、新郷村は神秘の村として人々の注目をあびるようになりました。

この「キリストの墓」は、平成二十八年（二〇一六）三月策定の「新郷村まち・ひと・しごと創成総合戦略」でも、平成二十六年の観光客人込客



図2 「キリスト祭」の様子(上から祝詞奏上、獅子舞奉納、「ナニヤドヤラ」奉納、2006年6月4日筆者撮影)

数が約一五・二万人であるとし、この現状を踏まえて「村の自然・歴史資源を活かして『しごと』を創出する」ため、「キリストの墓や大石神ピラミッドといった観光資源をPRし、もてなしの取り組みを推進することとで、交流人口を拡大していきます」と、同じく村内にある「大石神ピラミッド」とともに村の観光および交流人口拡大のための重要な資源として位置付けられている。また昭和三十九年(一九六四)からは、毎年六月に「キリスト祭」が開催され、『キリストの慰霊祭』として、「キリストの墓」の前で祝詞奏上、獅子舞および「ナニヤドヤラ」と呼ばれる旧南部藩領に伝わる盆踊りが奉納される(図2)。この「ナニヤドヤラ」の「ナニヤドヤラ ナニヤドヤサレヨ ナニヤドヤラ」という歌詞は意味不明で、様々な解釈がなされてきたが、なかには古代ヘブライ語であるとの説も存在する(後述)。この「キリストの墓」の存在については通常、次のような説明がなされる⁽²⁾。

この何とも突拍子もない「キリストの墓」に関わる奇譚は、古来より戸来村に伝わってきたものではなく、上述のように昭和十年突如として登場したものである。このことについて『新郷村史』では、「昭和一〇年に突如として湧いて出た事から、『湧説』とでも言った方がよいのかも知れない」とし⁽³⁾、「伝説」と区別して「湧説」という言葉を用いて説明している。

本稿において、この突拍子もない「キリスト湧説」を取り上げる理由は、この「湧説」の真实性・実在性を証明するためでは、勿論ない。しかしながら、この「湧説」をめぐる言説や動きを検討すると、この「湧説」が単なる与太話に終わるものではなく、一九三〇年代の地域社会と「歴史」を取り巻く状況が如実に現れていることが見えてくる。そこで本稿では、この「キリスト湧説」の「発見」譚についての検討から始め、そこから

ゴルゴダの丘で処刑されたのは、キリストの弟で、キリスト本人は日本に難を逃れて日本に来たという。キリストの遺体は、近くの戸来岳(一一五九メートル)で風葬され、四年後に白骨で埋葬されたが、キリストの墓(十来塚)という。その隣には、マリアの形見と弟の遺髪を埋めたという(十代塚)がある。新郷村の旧地名は、戸来村といい、「戸来」は「ヘブライ」が訛つたものだという。

見えてくる様々な動きと時代状況とを合わせて検討することにより、この「キリスト湧説」が一九三〇年代の時代状況のもとでいかなる位相を持つものであるか検討していきたい。

一 十和田国立公園の指定と戸来「神都」遺跡の「発見」

「キリスト湧説」の「発見」について、その重要な契機となったのが、昭和十一年（一九三六）の十和田湖の国立公園指定である。日本における国立公園は、アメリカの国立公園（ナショナル・パーク）制度を範に、「我が国自然の大風景地を保護開発して、一般世人をして容易に之に親しましむるの用途を講じ、国民の保健休養乃至教化に資せしめんとする文化的使命と、延いては外客誘致資し国際貸借改善上寄与せしめんとする経済的使命とを遂行せんが為」と、開発からの自然保護に加え、国民保健の教化および外貨獲得のための観光資源化が目的とされた。大正十年（一九二一）より内務省衛生局により、指定候補地についての基礎的調査が開始された⁵⁾。

こうした国立公園制定に向けた動きは、全国的な国立公園誘致運動を惹起した。造園研究の立場より国立公園問題を議論していた上原敬二（一八八八〜一九八二）は、そうした国立公園誘致運動について、「中には土地の投機、地元の繁栄、鉄道其他運輸会社の運動、代議士の選挙民籠絡手段」として利用される「お土産案」が少なくなく、「実に歎しい極み」であるとしている⁶⁾。こうした上原の嘆きを余所に、全国的な国立公園誘致運動が開されたが、青森県においても、内務省衛生局の候補地に指定された十和田湖を中心に運動が開されることになる。

青森県と秋田県にまたがる山間の十和田湖は、二十世紀に入り、大町桂月（一八六九〜一九二五）が「天下有数の勝地也」と紹介して以来、景勝地として全国的に知られるようになったことは有名である。また桂月の文章は当時の皇太子・嘉仁親王（のちの大正天皇）の目にも止まり、明治四十二年（一九〇九）の地方長官会議において武田千代三郎（一八六七〜一九三二）青森県知事に対して下問がなされるに及び、青森県でも十和田湖の景観維持・環境保全の必要性を認識し、明治四十五年（一九一〇）に「十和田湖保勝会」を設立することになった。これについて武田は、「十和田湖の美天下に冠たるもの、万古自然の神鑿に委かせ、未だ曾て人間の凡手を触れざらしめたるに在り」とし、「唯た其の在りの儘を維持して、人口を加ふるを避け、僅に人道を造り遊艇を浮へ、以て往来遊覧の便を開き、質素なる旅舎を設け、湖魚を捕へて、観光者を待たば足れり」と⁸⁾、十和田湖の観光開発にあたっては環境保全を最優先の上、開発は必要最低限のみにとどめる必要性を主張していた。

しかしながら、十和田湖が景勝地と知られるようになり、また前述の通り国立公園候補地に選定されるに及び、「観光地」としての十和田湖の声望が高まった結果、観光開発が推進されていく。大正十五年（一九二六）七月に東北森林管理局青森分局が提出した「国有林文化的施設調査」では、十和田湖について「遊客増加シ開発共ニ旅館其他ノ増加ニ伴ヒ貸付地ヲ拡張シ収入増加スベシ」と、観光開発の推進による国有林借地収入の増加が見込まれるなど、観光開発への期待が述べられている。また、十和田湖の環境保全を第一に掲げていた十和田保勝会でも、会（ひいては会を主宰していた青森県庁）を挙げた十和田湖の「売り出し」にかかるようになる。昭和二年（一九二七）四月から五月にかけ



図3 十和田湖観光ルート

て、東京日日新聞社と大阪毎日新聞社が行った「日本新八景選定」について、保勝会では県下各市町村に対して十和田湖への投票の呼びかけ

を行い、入選を果たす。また昭和六年三月十三日には、「我十和田候補地をして国立公園として其の第一次の指定を仰ぐ為めには、県民一致の努力を要する」とし、県庁内に国立公園協会青森県支部を創設した。¹¹⁾

こうして国立公園候補地選定を機に、官民挙げた十和田湖の「売り出し」にかかった青森県であったが、昭和六年三月三十一日の「国立公園法」制定に際して、瀬戸内国立公園、雲仙国立公園、霧島国立公園の三カ所が最初の国立公園としての指定を受けることになり、十和田湖は落選となった。青森県ではその後も陳情活動が行われたり、また地元法奥沢村が「世間八十和田湖アルヲ知りテ、地元ナル法奥沢村を知らルモノ殆ト無シ」として「十和田村」への改称を行うなど、十和田湖の指定に向けた機運づくりや運動を継続した結果、昭和十一年二月、内務省より十和田国立公園の指定がなされた。指定範囲は青森県東津軽郡荒川村、横内村、浜館村、南津軽郡竹館村、上北郡十和田村および秋田県鹿角郡小坂町、大湯町、七瀧村のそれぞれ一部となった。¹⁴⁾

こうした猛烈な国立公園誘致運動とともに十和田湖の観光開発は進められていく。国立公園指定に先立ち、青森県では観光客受け入れのため十和田湖へと通ずる道路と交通機関の整備がなされた。青森県内から十和田湖へと通ずる観光路線が、三沢線・青森線・黒石線・大鰐線の四路線とされた(図3)。これにともない、八戸から五戸を経て戸来村を経由するルート(牛ノ首峠)は十和田湖観光路線から外されることになった。

牛ノ首峠は戸来より十和田湖畔の宇樽部へと至るルートで(図3の点線部分)、地元では「アグリ坂峠」と呼ばれていた。このルートは明治十六年(一八八三)頃に青森県内最初の有料道路として牛馬道が開削されて以来、二十世紀初頭まで十和田湖に至る主要道路であった。¹⁵⁾しかし明治三十六年

に奥入瀬川沿いの林道が開削されると、そちらの往来が増加、また大町桂月が「奥入瀬の溪流の幽静、天下無比なること」、「十和田湖より奥入瀬溪を取り去らば、十和田湖の勝は、その一半を失ふべし」と評するに及び、奥入瀬溪流（奥入瀬川）の声望が高まった結果、主要道路の座をそちらに譲ることになった。これに加えて上述の国立公園観光ルート¹⁶の整備にもない、戸来村は十和田湖へと至る主要交通路から完全に抜け落ちる可能性が生じた。

こうした事態を受けて、戸来村ではその対策に乗り出すことになる。当時、戸来村長であった佐々木伝次郎は、大正八年（一九一九）に村長に就任するや、村内道路の改修など道路網の整備、また昭和恐慌期における社会事業や産業振興、また中堅青年育成のための村立高等学園の創設など、村の近代化・産業化に尽力していた¹⁷。佐々木は、上述の戸来村の十和田湖主要交通路からの除外の事態を受け、戸来村と十和田湖とを関連させた地域振興を図るべく、昭和九年（一九三四）九月に「戸来村郷土史蹟調査会」を発足させ、地域振興策を検討するために日本画家である鳥谷幡山（一八七六～一九六六）を招聘した。

鳥谷幡山は明治九年（一八七六）に青森県七戸の瑞龍寺二世鳥谷丹堂の次男として生まれる¹⁸。明治二十七年に函館来遊中の寺崎広業（一八六六～一九一九）と出会い、翌年、広業の門下として画家を志すため上京する。明治三十年には平福百穂（一八七七～一九三三）のすすめにより東京美術学校へ入学するとともに、日本絵画協会の共進会へ出展、第三回展に出展した「南海観音」が入選して二等褒状を授与された。また明治三十四年に広業が開いた天籟塾筆頭となるとともに、天籟塾同志の野田九浦（一八七九～一九七二）、町田曲江（一八七九～一九六七）らと

もに「美術研精会」を結成、会長に土方久元（一八三三～一九一八）、顧問には広業のほか川合玉堂（一八七三～一九五七）、尾形月耕（一八五九～一九二〇）、小堀鞆音（一八六四～一九三二）らを迎えるなど、若き日本画家として頭角を現していく。

大正二年（一九一三）、鳥谷は広業との確執をきっかけに美術研精会を退会、画家としての第一線から退く。それと同時に鳥谷は中国・台湾周遊の旅に出かける。高井憲夫によると、この周遊旅行は鳥谷にとって自らの絵画における「真景のふる里」への旅である一方、「現実の中国の風景を目撃し、その凡庸さに気づいた結果、「己の保持していた真景が日本の風景と不可分なものであったことに思いあたる」ものであったとする¹⁹。そして、鳥谷が自らの「真景のふる里」として見出したのが、画家を志した頃に出会った十和田湖の風景であった。

広業の門を叩いた明治二十八年（一八九五）六月、鳥谷は未だ世にほとんど知られていなかった十和田湖を訪れ、「其神秘靈妙な絶景に撃たれて信仰的憧憬」を得る²⁰。以来、鳥谷は画業の傍ら十和田湖の顕彰に努める。前述の通り十和田湖が全国的に有名になるのは大町桂月による紹介が契機であったが、それは明治四十年に鳥谷と、同じく青森県五戸出身のジャーナリストである鳥谷部春汀（雑誌『太陽』の編集者、一八六五～一九〇八）とともに大町に十和田湖探訪を働きかけた結果であった²¹。

また大正八年（一九一九）に土方久元を、大正十年には平福百穂、近藤浩一路（一八八四～一九六二）ら「東京漫画会」一行二十余名を十和田湖に案内するとともに、鳥谷自身も大正十一年に自費出版で『十和田湖勝景画譜』を出版、大町桂月と武田千代三郎の序文とともに全二五図を掲載している²³。このような背景があつて、戸来村と十和田湖とを関連さ

せた地域振興を企図した佐々木は、その助言を鳥谷に求めたのである。

佐々木の招聘を受けた鳥谷は、昭和九年（一九三四）十月、求めに応じて戸来村の「迷ヶ平^{まよがたい}」の調査を行う。迷ヶ平は青森・秋田県境付近にあり、十和田湖の外輪山である十和利山の麓に位置する高原である。戸来村内で最も十和田湖側に行った場所の山奥であり、山深いために猟や木の切り出しに赴いた村民が道がわからなくなることから迷ヶ平と名付けられたとされる。²⁴この迷ヶ平が調査地とされたのは、佐々木が「迷ヶ平の勝地が、十和田湖に関係深いので、是非之を見て紹介してくれ」と鳥谷に依頼したためである。同地を調査した鳥谷は、その時のことについて以下のように述べている。²⁶

抑も此迷ヶ平は湖畔宇樽部から直径一里を距った所謂外輪山の一部であり、海拔二千尺芝生と蘚苔に蔽はれた清浄幽静の高原で、正北には三角形の尖山（十和利山―引用者注）が聳えて居り、如何にも莊嚴雄麗の境地であるのに驚き、不図想起したのは彼の竹内古文獻に在る、葺不合朝三十七代のみかどの仙洞し給ひし神都の跡であるを考へ……（後略）

すなわち迷ヶ平の調査を行った鳥谷は、その莊嚴夕麗の様子から「彼の竹内古文獻に在る、葺不合朝三十七代のみかどの仙洞し給ひし神都の跡である」と考えたのである。ここにある「竹内古文獻」とはいわゆる「竹内文書」と呼ばれる、茨城県磯原（現北茨城市）にある天津教の教祖である竹内巨磨（一八七五？～一九六五）が、先祖伝来の古文書として発表した資料群である。内容は古事記・日本書紀以前の歴史を伝えるも



図4 「お石神」。現在は「大石神ピラミッド」とされ、観光地化されている。

オカルト歴史ファンから一定の支持を得ている。³⁰なお近年では「竹内文書」の成立過程やその思想などについて藤原明などによる詳細な検討がなされ、その実態が解明されつつある。いずれにせよ鳥谷は戸来村での調査に及び、すでに「竹内文書」の存在が念頭にあったことがわかる。この点については後述したい。

また迷ヶ平の調査の後、鳥谷は迷ヶ平から五戸川沿いに下流に十キロ余り下った集落である羽井内へ向かい、その北にある「お石神」を調査、「之が全くピラミッド形の山容であり、而も此巨石が悉く日の御霊の大神を祀る祭壇に対しての拝壇で、幅四間に長五間もある鏡石や、東西南北を示す方位石やドルメン（八足の前身）もあり、全く神代史蹟であることを発見³²する。この「お石神」（大石神、大石上とも称す）は、『新郷村史』所載の戸来三嶽神社の記録では、「字石上申処ハ戸来村ノ西ニ

の（いわゆる「古史古伝」）とされ、その世界観は全人類の文明の発祥地が日本であること、またかつて日本の天皇が全世界を統治していたことなど壮大なスケールかつ荒唐無稽な内容を持つものである。昭和初期にすでに山崎鐵丸²⁸、狩野亨吉²⁹による文献批判により「偽史」とされ、すでに学術的価値は皆無となつてはいるものの、現在でもいわゆる

アリ原野中に突起せる高所に大石の重積して見ルモ常ならザル異所なり故ニ今モ村民ハイシガミの社と称へ崇め居れり」(傍点引用者)と、大石の重なる奇観が故に古来呼ばれた名称であり、昭和初期までは雨乞いの霊場として伝えられてきた場所である(図4)。鳥谷はこの場所もまた「神都」迷ヶ平と関連する神代遺跡としてみなしたのである。

こうして佐々木による戸来村と十和田湖を関連させる地域振興の企ては、鳥谷を介して戸来に「神都」を「発見」するという、思わぬ方向に転がり出したのである。

二 鳥谷幡山と「キリスト湧説」

——「竹内文書」による神話の歴史化——

戸来村に「神都」を「発見」した鳥谷は昭和十年(一九三五)五月、その調査結果を地元紙『東奥日報』で発表する³⁵。この記事の冒頭、鳥谷は青森県南部地方から岩手県北にかけて歌われる盆踊り囃子「ナニヤドヤラ」がヘブライ語であるとの説に接したことを受け、「灯台元暗しとはよく言ったもので」、「神代太古に於ける戸来嶽の神都に、当時諸外国の民族と如何なる関係があり、如何なる由来因縁があるのか」を解明する端緒についたことを「独り私のみでなく同郷の読者と共に祝福に堪へない」と述べている。この「ナニヤドヤラ」ヘブライ語説は、アメリカカ在住のシアトル長老教会の牧師であった川守田英二(二八九一〜一九六〇)が発表した説であり、昭和九年(一九三四)十月に『大阪毎日新聞』紙上で発表された³⁶。鳥谷はこの川守田が発表した説を奇貨とし、自らの説(戸来「神都」説)に取り込んだのである。



図5 竹内巨磨、鳥谷幡山らによる実地調査行程図

表1 竹内巨麿、鳥谷幡山らによる実地調査行程表

8月6日	夜 竹内巨麿、磯原を夜行列車で発つ。平駅で鳥谷幡山、澤田健と、小高駅で佐藤氏と合流。
1日目	
8月7日	朝 尻内駅着。山浦武夫、小保内樺之介らの出迎えを受ける。車で五戸の中川原貞機邸へ向かう。中川原邸の神棚で竹内が祝詞を上げ、朝食の後、間道経由で戸来へ向かう。 戸来金ヶ崎の旅宿「中村屋」に入り、小休止。 戸来三嶽神社へ参拝、同社の見瀧祠官の案内、竹内は祝詞を上げた後、祭神が異なっていることを告げる 自動車にて長峰集落野月の「墓所館」に登る。竹内は二つの丸塚に黙禱の後、「此处だ此処だ」と力強く言う。 羽井内集落を訪ね、久保田氏の案内のもと「お石神」へ向かう。 「お石神」北側の斜面を下り柿ノ木平へ。柿ノ木平の盛り土を竹内は「天を仰ぎ地を相して熟視し」た後黙禱、「やはり此处だ」と言い、盛り土に「統来祈神」、墓所館の二つ塚に「十来塚」の目標を建てるよう指示。 夜 中村屋にて懇親会。今淵正太郎より持山の情報を得て、鳥谷は松照彦天皇陵ではないかと考える。
2日目	
8月8日	朝食の後、今淵の持山を目指して自動車にて中市村へ行く。 中市到着後、一行は徒歩で今淵の持山へ登る。鳥谷は山頂へ行く一行と離れて写生を行う。下山する竹内と遭遇、竹内は「間違いなし」と述べる。後、「拝殿」と思われる祠で遷座式を実施。 遷座式終了後、自動車にて五戸を経由して三本木へ。太素神社境内の太田海軍大佐邸で昼食をとった後、蔦温泉へ向かう。 途中、澤田、奥瀬、百目木、淵沢(いずれも現十和田市)を経由し、焼山から蔦へ入る。竹内は同行の太田吉司の案内で「丸山を究むべく」脇道に入るが、鳥谷ら一行は蔦温泉へ直行。
3日目	
8月9日	早朝、入浴の後、竹内は太田の案内で赤沼見物へ。一行中の諏訪富多*の案内で大湯温泉を目指すことに。 *諏訪富多 秋田県鹿角郡有数の大地主、平田盛胤の娘と結婚、のち「大湯郷土研究会」会長となり「十和田高原神都論」を提唱 自動車にて焼山、奥入瀬溪流、子ノ口(十和田湖畔)を経由して、宇樽部の「宇樽部観光ホテル」に入る。宇樽部棧橋より遊覧船に乗り湖上へ。御倉半島を回って、休屋で上陸。休屋の「画屋湖山荘」で昼食。再び自動車に乗車し、発荷峠を越えて秋田県へ。1時間余で大湯着。諏訪の経営するホテルに着。小休止ののち大湯環状列石の見学。夕刻に帰宿。
4日目	
8月10日	戸来方面へ向かう。途中道に迷いつつ、迷ヶ平へ到着。迷ヶ平にて竹内は「アッ此处だ此処だ」と述べ、今回の調査が「竹内文書」の記載内容との対照調査であることを一行に明かし、十和利山(尖山)が「日本最古のピラミッド」であると述べる。 迷ヶ平にある村の番小屋で弁当を食べ、自動車にて戸来中心部へ。「村の共同倉庫のようなところ」で蕎麦をご馳走になる。竹内は住民が持ち込んだ石器を「太古の高貴な方の捧げ物」とであると鑑定する。佐々木村長より近くに「御仙洞」という場所があるとの情報を受け調査。仁々杵天皇の滞在地であるとする。 自動車にて八戸方面へ。途中、八戸の今淵邸で小休止の後、午後6時に鮫の「歐鳴館」へ入る。深夜、竹内のもとに「誇大妄想狂」が闖入する。調査結果は他言無用であると深夜に会議。
5日目	
8月11日	早朝、周辺を散策。蕪島を訪れる。朝食後、昨夜情報を仕入れていた異名地や伝説を頼りに、馬淵川左岸の「松ヶ崎」へ向かう。 館鼻、蓮沼神社、八戸を経由し、馬淵川左岸の八太郎村へ。日計集落を経由して石堂集落へ。一行は石堂の村助役宅へ向かうも、鳥谷は一人で貝鞍神社へ。貝鞍神社を「キリストの上陸地」とであるとインスピレーションを得る。 助役宅で一行と合流の後、自動車で八戸市内へ。料亭で神田市長らの昼食の招待を受け、三八城神社を参拝の後、尻内駅から鉄道に乗車。 岩手県の金田一で下車し、同行の小保内樺之介の案内のもと、武内神社、吞香稲荷神社、相馬神社を参拝。帰京を急ぐ竹内の意向により、調査団はここで解散となる。

昭和十年（一九三五）八月、鳥谷は「竹内文書」の所持者である竹内巨磨を招聘し、戸来³⁷神都³⁷の実地調査を行う。その様子について以下、鳥谷が記した『十和田湖を中心に神代史蹟たる霊山聖地之発見と竹内古文献実証踏査に就て併せて猶太聖者イエスキリストの天国（アマツクニ）たる吾邦に渡来隠棲の事蹟を述ぶ』（以下『霊山聖地之発見』と略記）をもとに復元する（表1および図5も参照）。

八月六日に磯原を夜行列車で出立した竹内は、福島県の平（現いわき市）で東京から合流した鳥谷および澤田健（鍼灸師・柔術家、一八七七〜一九三八）、小高（現南相馬市）で「佐藤氏」と落ちあい、翌七日朝に青森県の尻内駅（現八戸市）に到着した。尻内駅で八戸市の山浦武夫、小保内樺之助らの出迎えを受け、五戸にある中川原貞機（元衆議院議員、三戸郡浅田村長、一八七六〜一九四八）の自宅へ向かった。中川原邸で朝食をとった後すぐに戸来へ向かい、戸来村の中心地・金ヶ崎にある旅宿「中村屋」に落ち着いた。なお戸来への道のりは、前日來の大雨の影響のため五戸廻りではなく間道を通って向かったという。

旅宿に入るも休む間もなく、一行は戸来三嶽神社へ参拝しつつ、長峰集落の野月にある「墓所館³⁸」という場所へ向かった。そこにある二つの丸塚の所での竹内の様子について、『霊山聖地之発見』では次のように記す³⁸。

翁は黙禱をなし、此処だくと力強く言はれ、秘かに期するものがあつたらしく……（後略）

一行はさらに西の羽井内集落へと向かい、そこで案内人を頼み、鳥谷

が神代遺跡とした「お石神」へと向かった³⁹。

小山を超へ溪を下り又登る、更に下つて仰げば即ちピラミット形のお石神山である、中腹の小鳥居を潜つて左りへ折れると、蒼蒼たる樹林の中に巨石が多数に在る、鏡石の倒れたのやドルメンや方位石杯を詳細に調べて、天の日霊を祀る祭壇磐境に対する拝壇たるを認め、更に尖つた山巔に登った。

「お石神」を確かめた竹内は、さらに斜面を北へ下り、「お石神」の北に広がる「柿ノ木平」の調査を続けた。そしてそこにある二間〜三間（約三・六〜五・四メートル）の長方形の盛り土を見た竹内は、次のような様子を示している⁴⁰。

翁は天を仰ぎ地を相して熟視し、黙禱を続けてから独りで肯かれ、矢張此処だくと許り、これが余等には何んの事やら不思議でならぬ、其れは其筈で、今日迄誰れにも見せぬ古文獻を独で調べて来ての対照探査であるからである、そして此処に目標を建てよ統来訪神と後に記されよ、前の野月の二ツ塚には十来塚と書くべしと村長に話された

困惑する鳥谷を余所に、竹内は柿ノ木平の盛り土に目標を立てて「統来訪神」と記すこと、また先の墓所館の二つの丸塚には「十来塚」と書くよう、佐々木に話した。困惑しつつも鳥谷は竹内に問いかける⁴¹。

尤も斯様に探し当てたのも、村人に一々変った伝説や不思議な地名杯を聞糺してからのことであり、其最後の力強き此処だ／＼の一言と十来塚の十と言ひ、お石神のイシが如何にも異様に感ぜられたので、余は密かに掌の内・十の字を書いて若しや此ではないでせうかと聞くと、今少し黙れ／＼の御宣託である（傍点引用者）

これを受けて鳥谷は、戸来が「嗚呼不思議なるかな、二千年前の昔、西亜細亜の果てより渡来した猶太聖者の隠棲終焉の地」であることを悟る。これこそまさに「キリスト湧説」誕生の瞬間である。墓所館と「お石神」、柿ノ木平という駆け足で行われた実地調査で竹内が示した反応をもとに、鳥谷は戸来とキリストとを関連付けるインスピレーションを得た。いわば「キリスト湧説」は鳥谷のインスピレーションによつて、この時に忽然と出現したものであつたのである。⁴²

一日目の調査を終えた一行は、その夜、旅宿「中村屋」で、村民を交えた約三十名で懇親会を開く。そこに参加していた八戸市の実業家である今渕正太郎（一八八八〜一九五七）より鳥谷は、今渕が中市村（現五戸町）に所有している持山について「空溝のやうな階段のある、昔しから冒すことの出来ぬと言伝へてる山か、如何やうなものでせう」との情報を受け、「一昨年秋、少しく探査したことがある葺不合朝三七代松照彦天皇は、曾つて戸来岳に仙洞された後に、神幽りまして五戸に葬ると記され⁴³」ていることを思い出し、俄然興味を持ち、竹内に調査するよう掛け合う。翌八日は晴天となつた。一行は旅宿で朝食を済ませたのち、中市村にある今渕の持山へと向かつた。調査を行った竹内に鳥谷が問うと「間違いなし」との回答であり、この今渕の持山は「竹内文書」に記される葺

不合朝三七代の松照彦天皇⁴⁴の陵墓であるということになつた。ここを天皇陵と確定し、略式ながら遷座式を行った竹内の様子を見て、「其持主たる今淵⁴⁵氏や、村人の悦ひは譬へやもなかつた」と鳥谷は記すが、松照彦天皇の陵墓の「発見」は、前述のように戸来村に松照彦の「神都」があることを「発見」した鳥谷にとつても「悦ひは譬へやもなかつた」ものであつたと思われる。

一行はその後、車で二十キロほど北にある三本木町（現十和田市）へ向かい、同町にある太素塚（三本木原台地の開拓を行った新渡戸傳へ新渡戸稲造の祖父、一七九三〜一八七二）を祀る場所）境内の太田海軍大佐邸で小休止、昼食をとつた後、車にて十和田湖にほど近い蕨温泉へと向かつた。蕨温泉もまた大町桂月によつて紹介され、桂月が晩年の終の棲家にしたことで知られる一軒宿の温泉であるが、鳥谷もまた「旧知別懇の間柄」であり、その日はゆつくり温泉につかつて体を休めた。

翌九日は自動車にて焼山を經由し、奥入瀬溪流を訪れる。桂月が絶賛した奥入瀬溪流沿いの道を自動車で走り、十和田湖の入口・子ノ口⁴⁶に出る。そのまま湖岸を走り、一行は宇樽部の宇樽部観光ホテルへ入つた。ホテルで小休止の後、湖畔の棧橋より五十人乗りの遊覧船に乗り、御倉半島を回つて、鳥谷が奉納した十和田神社の大鳥居の側より休屋へ上陸する。休屋へ上陸した一行は、鳥谷の画房である「画屋湖山荘⁴⁶」に入つた。弁当で昼食を済ませたのち、一行は再び自動車⁴⁶で秋田県方面へ向かつた。この日の目的地は秋田県の大湯温泉である。県境の発荷峠を越え、一時間ほどで大湯温泉のホテルへたどり着いた。小休止ののち、竹内「翁の性急で、まだ日が高いから石群を見ませうと急立つ」。一行の大湯温泉来訪の大きな目的は、昭和六年に発見されたばかりの大湯環状列石（現

在は国特別史跡かつ世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」構成資産）の見学のためであった。大湯環状列石を見た竹内は「此遺跡は坪石と云つて礎石の外を繞らず台石のやうなもので、太古に於ける此地方の司きをされた高貴な方の館跡である」と神代遺跡との関連付けを行っている。

翌十日、一行は再び戸来村方面へと向かう。大湯温泉より一度十和田湖方面へ向かい、途中、道を戸来方面へ別れてたどり着くのが迷ヶ平である。本来、戸来方面から来るのが最も近い迷ヶ平であるが、この日に大湯方面から来るようになったのは、大雨のために道路が不通となつていたためであった。道中、道に迷いつつも迷ヶ平に到着、周辺を調査した竹内は次のようなことを話した。⁴⁸

翁はアチコチ見廻しアツ此処だくと独り肯づく、今日迄は誰れにも話さぬが、私かに開いて見た古文献にある眉ヶ平は此迷ヶ平で、此尖山が古名剣山（トバリヤマ又トガリヤマ）で、天然の山を利用した日本最初のピラミッドであると話された

すなわち「竹内文書」に現れる上古（葦不合朝に先立つ皇統）第二四代・仁々杵天皇の「神都」である「眉ヶ平」こそ迷ヶ平のことを指し、また尖山（十和利山）こそ日本最初のピラミッドであるとしたのである。ここで言うピラミッドとは、「竹内文書」の信奉者である酒井勝軍（一八七四～一九四〇）の提唱する、日本に古来より存在するとされるそれである。酒井が昭和九年（一九三四）五月、広島県比婆郡本村（現庄原市）の葦嶽山の实地調査より、同山がピラミッドであると発表したこと⁴⁹に始まる。前述の通り前年の鳥谷による迷ヶ平調査では、迷ヶ平の「正北に

は三角形の尖山」が聳える威容をたたえたとともに、「お石神」について、「之が全くピラミッド形の山容」であると述べているが、竹内は尖山こそピラミッドであるとしたのである。こうして竹内より迷ヶ平が「神都」であるとお墨付きを得た鳥谷は、一方で十和田湖を「神都に属する神苑外苑」とみなし、「十和田湖はこれから唯享樂的に仇やおろそかに遊興的観覧すべきものではない」とする。⁵⁰後述のように、迷ヶ平が「神都」であることは、十和田湖に惹かれ、その顕彰を続けてきた鳥谷にとつては、いわば「キリスト湧説」以上に重大な意味を持つものであった。

迷ヶ平で弁当による昼食を終えたのち、一行は大雨被害から修復を受けたアグリ坂（牛ノ首峠）を越え、戸来村中心部へと向かった。「村の共同倉庫のやうな処」で蕎麦の馳走を受けていると、佐々木村長より「此村に御仙洞と申す処があります」とされ、一行は食後に裏手の高台へ上った。ここで竹内は「暫し方位と地形を見極めたのち、矢張仁々杵天皇の外国よりお帰り時、眉ヶ平の神都にお出でになる前、暫し御駐輦のお跡である」とし、「神都」迷ヶ平の関連遺跡であると「証明」した。これには「村長は自分の配下東西七八里の地域内に、斯くも多数の靈山聖地の存在に驚嘆し、只管感謝の涙に暮るのであった」と、⁵¹村の地域振興策として鳥谷に史蹟調査の依頼をした佐々木は、竹内の調査によって村内に多数の「神代遺跡」が存在するという、思いもかけない喜びに感謝したのであった。

戸来村を辞去した一行は、自動車にて八戸へ向かい、市内の今淵正太郎邸で小休止の後、午後六時に八戸市鮫の旅館「歐鳴館」へ入った。調査の疲れを癒すため、一行は塩湯に浸り、浴衣のまま太平洋を望みながら山海珍味に舌鼓を打つ。疲れのまま一行が就寝した夜、旅館に珍客が

訪れる。その者は竹内の名を呼び、「神の神秘に属する事は容易に解るものでないから、吾と共に今より吾師某の処へ行け」という。この「誇大妄想狂」の闖入は竹内にある種の危機感を抱かせ、一行に対して次のように語る。⁵²

斯様に人の迷惑を顧みず、夜中に誇大狂の来るのを見ると、同志中に或は吾事の如く自慢顔に、今回の探求した事を残らず喋つたものがあると見える、無論将来は全部発表すべきであるとしても、探求中に右から左りと一々漏られては尠からず迷惑であれば、可成早く帰郷したく、又一部の同志へは其機密を一切漏らさぬやうに……(後略)

こうして翌十一日を迎えたが、この日は朝食の後、「昨夜聞糺して置いた附近の異名地や伝説杯ついでを便りに向側(八戸市中心部を挟んだ市域西側のことカー引用者注)の松ヶ崎に行くことにした」⁵³。館鼻(現在の館鼻公園付近)から西を眺めつつ市内を一巡して馬淵川河口付近の左岸にある八太郎村へ行き、地元の人々に話を聞きながら同村の「見計」⁵⁴集落を經由して、石堂集落へとたどり着いた。その過程で鳥谷は「余は去七日、戸来で探つた聖者の墓のことから想浮べ、其聖者は上世に於て此処から上陸されたのに感付」⁵⁵く。すなわち「キリストの墓」の「発見」時と同様、鳥谷は馬淵川左岸の調査によつて、ここが「キリスト上陸地」であると思ひ、一行から離れて独り調査を行った。調査に向かつた石堂の貝鞍神社にて、以下のようなインスピレーションを得る。⁵⁶

貝鞍神社に辿り着き、よくく境内を調べると、南面したお宮から数間隔で、囲り四十間位の深い池があり、鳥居は直ぐ池の畔の御神木の脇に建てられた微妙さは、抑も何を暗示されてゐるであらう、畢竟此聖者が太平洋の大海から、此地へ上陸した象を現はしたものである、然し物変り星遷り、何時しか其祭神が穀物を司る稲荷明神に変わり、外には何等知られてゐないが、實際は聖者の暫し滞留せられた故地であるから、曲りながらも石堂(イシト)と転訛したのである。……(中略)……余は又池と鳥居の関係にいたく暗示を得たのを悦び、お宮を廻ると一人の編笠冠つた翁が草刈最中である、……(中略)……其笠を取て挨拶に顔を上げた一刹那、こはそも如何に、其面影が絵で見た聖者の顔其儘なので、ビックリして暫し言葉も出なかつた……(中略)……急ぎ足で助役の宅(一行が逗留していた八太郎村助役宅—引用者注)へ着き、一行に其奇談を話すと、ソレや好い事を見られましたと羨ましがられる、……(後略)

これを読んでも理解に苦しむところであるが、いづれにせよ鳥谷は貝鞍神社が「キリスト上陸地」⁵⁷であると、確信に近いインスピレーションを得て、それを一行に伝えたのであつた。一行はその後再び八戸市内へ戻り、神田重雄八戸市長らの招待で料亭での昼食をとり、八戸城址(三八城公園)にある三八城神社を参詣後、鉄道に乗つて八戸を後にした。その後一行は岩手県の金田一で下車、岩手県三戸郡福岡町(現三戸市)の武内神社と吞香稲荷神社、相馬神社を参詣、竹内が「誇大狂に気を腐らした為に直ぐ帰京する」⁵⁸としたことから、この場で調査団は解散となつた。以上が竹内・鳥谷らによる実地調査の顛末であるが、この調査につい

て行論の関係上、以下三点指摘しておきたい。第一に、この実地調査において初めて「キリスト湧説」が登場したことである。前述のように、この実地調査の発端は、昭和九年に鳥谷が行った戸来「神都」遺跡の実地調査を受け計画されたものであるが、この調査の過程では戸来村と「神都」遺跡の関係性のみならず、キリストとの関連性までもが「発見」された。しかしながらその関連性の「発見」は、『靈山聖地之発見』の記述を信ずれば、竹内の側より積極的に持ち出されたものではなく、鳥谷によるインスピレーションによってもたらされたものであると考えられる。また八戸・貝鞍神社における「キリスト上陸地」の「発見」もまた、鳥谷の単独によるものであると推察される。すなわち言うなれば、「キリスト湧説」の生みの親は、鳥谷嶺山その人であることができよう。⁵⁹

二点目は、鳥谷による戸来「神都」遺跡の調査を踏まえた実地調査であったにもかかわらず、四泊五日の調査行程で実際に戸来村において調査が行われたのは、一日目（八月七日）の朝食後に戸来に入ってから日暮れまでの墓所館、「お石神」、柿ノ木平の調査と、四日目（八月十日）の昼前後、迷ヶ平と金ヶ崎「御仙洞」のみ、正味二日足らずの日程である。その一方で、この短い行程の内の丸一日を費やして行われたのが三日目（八月九日）の十和田湖観光であった。今回の調査行程では、前述の通り大雨の影響により戸来から迷ヶ平への道路が不通となり、十和田湖を大きく迂回して秋田県側より迷ヶ平に入ることになった関係上、そのついでとして十和田湖を観光したということも考えられようが、それにして丸一日を観光に費やしていることは、日程を割き過ぎているようにも思われる。

この調査行程は誰が主導して組んだものであるかは定かではないが、前述の通り、今回の調査は鳥谷が竹内を招聘して行ったものであることを考えると、地元との関係が強いこと、また地理にも明るいことも踏まえ、やはり行程は鳥谷が主導して組んだ可能性が高いと考える。そうであれば、この約一日間の十和田湖観光は、大湯温泉へと向かうついでに行程に組み入れられたというよりは、むしろ鳥谷によってあえて行程に組み入れられたと考える方が自然である。前述の通り十和田湖顕彰に努めていた鳥谷は、土方久元や東京漫画会など、ことあるごとに人々に十和田湖を訪れさせ、その美しさを目の当たりにさせている。実際『靈山聖地之発見』を読むと、今回の神代遺跡調査とはほとんど関係のない十和田湖観光の様子について、たとえば奥入瀬溪流の様子について、「ネキヤウの蔓が大木に絡まり、桂の房々した趣は都人には真に珍しからう、殊に草木を負ふた河中の嶋や岩石の鮮やかな苔色、左右の断崖から落下する大小幾多の瀑布が、梢の間に見え隠れして応接に暇がない位」など、情感たっぷりの様子で描いている。⁶⁰鳥谷にとつてはこの調査において、戸来の神代遺跡を見てもらうこととともに、自らが愛する十和田湖を見てもらうことも重要なものであったと考える。

三点目は、この実地調査で見出された「キリストの墓」および「ピラミッド」については、現在伝えられているそれとは微妙な相違がある点である。たとえば「キリストの墓」について竹内は、前述の通り実地調査では墓所館の二つの丸塚を「十来塚」と呼び、柿ノ木平の盛り土を「続来訪神」としている。また「ピラミッド」についても、鳥谷が「ピラミッド形の山容」と見た「お石神」ではなく、迷ヶ平の真北に聳える尖山（十和利山）を「ピラミッドである」としている。一方、現在伝えられている「キ

リストの墓」は、墓所館の二つの丸塚のみを指しており、一方がキリストの眠る「十来塚」であり、もう一方はキリストの弟・イスキリの遺髪と耳および聖母マリアの遺骨を葬った「十代塚」である。またピラミッドについては、「お石神」を現在では「大石神ピラミッド」と呼び、またさらにその六百メートルほど先に「上大石神ピラミッド」の二つが所在するとされている。

この実地調査の結果と現状との相違をどのように理解すればいいのか。この点を考える上で、実地調査の後日譚を見る必要がある。実地調査が行われた翌年の昭和十年（一九三五）十月十日、磯原の天津教においてモーゼおよびキリストの大祭典が挙行され、そこで「竹内文書」中より発見されたとされる「キリスト遺言状」が公表される。⁶²『靈山聖地之発見』に転載された「キリスト遺言状」を以下に抜粋する。なお煩雑になるため、鳥谷による注釈は省略し、適宜句読点を補う。

☆イスクリスクリスマス遺言 天国の言バニテフミシ

△天国神倭^{カムヤマト}十一代天皇即位二十九年シハツ月立^{ツク}三日、アヂチ国ユダヤカルバリノ岡ニ難ニ合フ汝ガ弟イスクリ、汝ニカハリテ三十三歳死ス（中略）

△天国神倭十一代五十狭茅天皇即位三十三年ケサリ月籠^{コモリ}六日、天国チヂノクノ八戸ヤレコ、トネコノ水門松ケ崎上リ、イスクリ□^{ス脱カ}トマル貝鞍^{カイクラ}ノ里ニ宿ル

△同天皇三十三年ウベコ月籠五日、戸来宮参拜、天日^{アマヒライト}来劍^{キリ}バリ神山^{ミツト}宮参拜、眉^{マユケ}ケ平^{ヘイ}仁^ニ々^々榮^ノ木、ハヤレ月籠六日迄天国神へ乞ヒ願フ居ル（中略）

△天国ノ言バ文字才習フ、十来太郎天空ト云フ（中略）

△神主自身、天皇ヒ言上シ詔賜フテ、☆イスクリス万国五色人ヨウ、此太神宮へ納祭ル汝ガ造リ像オ、汝祭思ヒヨフ今ヨリ先ノ代、必ズ千九百三十五年ヨリ汝ガ像霊、再生出頭ル代ナルゾ、汝ガ名、統来訪神太郎天空ト云フ（中略）

△道路^{チヂ}奥^{オク}戸^ヘ来^{ライ}野^ノ月^{ツキ}墓^{ハカド}所^{コト}館^{ドモ}ニ、イスクリクリスマス汝ガ体骸才葬ル所、門人金笠太郎坊、大平太郎坊ニタノム

△劍^トガリ太郎大天空坊、汝ガ墓地才定メ、汝ガ霊ガデタラ、五色人ヨフ必ズソムクナヨフ、ソムクナヨフ、ソムクトシヌルゾ

△汝ガ身代リ、イスクリ、十来^{ジュウライ}墓^ボ頭^{ガタ}髪、耳才葬ル

△神倭十二代即位十一年ウベコ月立五日クレ六ツ刻、百六歳ニ神^{カミ}幽^カル、十来ニ神幽リ統来ニ葬ル、十来塚ト云フ

ここに見られるように、天津教で発表され、鳥谷によつて書き写された「キリスト遺言状」には、実地調査で発見された「キリストの上陸地」である貝鞍神社のことが記されているとともに、「キリストの墓」および弟イスキリの墓は「十来墓（十来塚）」とされ、キリスト（十来太郎天空）が再臨する際、その名を「統来訪神太郎天空」とするとされている。またピラミッドについては「天日来劍バリ神山宮」とされ、尖山がピラミッドであるとされるなど、実地調査の「発見」と概ね齟齬がない。

しかしながら、その後「キリストの墓」の存在を世に知らしめた、山根菊子（キク）による『光りは東方より』では、「イスクリスは、身代りに立てるイスキリの頭髪及び耳を葬り、母の墓を合せて一とし『十代墓』を営み」、「景行天皇即位十一年四月五日、暮六ツ刻、トバリ山に於いて

百十八歳を以つて神去、戸来野月墓所館に葬り、十来塚といふ」と、キリストの墓⁶⁴。「十来塚」および弟イスキリの墓⁶⁵。「十代墓」という、現在の認識と近い点が記されている。この山根の著作などで広まった「キリスト湧説」の展開について、鳥谷自身はあまり快く思っていないかつた節が見られる。後年、鳥谷は次のように記している。⁶⁶

彼の野月なる沢口家で保管してある墓所館の二ツ塚は、竹内翁をはじめ或人方は一ツを聖者の墓と一ツを母マリヤと犠牲者たる弟の遺品を埋めたものとして吹聴しているが、これが抑の誤りであり聖者在世中に丁重に葬られたのは母と弟との別々の御塚である。……(中略)……竹内翁にしても、己れが古文献を所蔵するからとて勝手に誤れる解釈をして平然たるものがあり、斯くして両々相待つて世を過まる態たらくでは、真に何等需むる所なく真意を籠めて信仰的信念を以て、其頭影に努力する私等にとつては堪え難き苦惱其ものである。

また別の箇所では鳥谷は、山根菊子と思しき女性が訪ねてきた際に「キリスト湧説」について話したところ、彼女らが鳥谷による『霊山聖地之発見』をもとに「彼の地を探りて後信州戸隠山に籠り著作をなしたと分かったが、之が真に災いの種であり……(中略)……之等を己れが発見探求したかの如く公言して憚らないのは呆れたものであった。……(中略)……唯々売名と利潤を逐ふ事に間違いないのであるが尚後に聞く処によれば、彼等は更に改説してキリストは日本で死んでいると恰も行路病者の如くに、卑野の言を以て呼棄にし、又戸来の子孫は無い筈など、言触らしたとの事

であるが、之は皆竹内翁の自解と口癖ソックリである」と、竹内による「キリスト湧説」の「勝手に誤れる解釈」や、山根による「売名的行為」について怒りを以て受け止めていたことが推察される。鳥谷が生み出した「キリスト湧説」は、その後、鳥谷の思惑を超えた展開を見せ、その様子に鳥谷は困惑と怒りを覚えることになったのである。⁶⁶

それでは、この「キリスト湧説」は、鳥谷を「生みの親」としながらも、いかなる理由からこの世に誕生したのだろうか。この点について、鳥谷との関わりから二点検討したい。一点目は「竹内文書」の世界との関わりである。竹内らとの実地調査に先立つ昭和九年(一九三四)の迷ヶ平「神都」の「発見」に際して、鳥谷の念頭にはすでに「竹内文書」が存在していたことは前述の通りである。

それでは鳥谷が「竹内文書」の世界に触れたのはいつの頃であったのだろうか。昭和四年(一九二九)三月十日、酒井勝軍は天津教の「神宝」を拝観するために竹内のもとを訪れるが、その際に同行者のなかに鳥谷が含まれている。⁶⁷その時のことについて鳥谷は、「文献、神宝等を拝観して初めて神代の太古のことを悟るを得たのを歓喜し、爾来研鑽を怠らぬお蔭で、徐々に史蹟を探ると共に之を語を榮譽とする」と述べ、天津教での「神宝」拝観が、鳥谷を「竹内文書」の世界に触れさせる契機となつたと見られる。鳥谷と酒井の出会いがいつであったかは定かではないが、その後、鳥谷と酒井は親交を結び、前述のように昭和九年五月の酒井による葦嶽山ピラミッドの「発見」の際には、鳥谷も実地調査に同行している。⁶⁸この酒井の実地調査への同行は、鳥谷による迷ヶ平「神都」遺跡の発見に際して重要な経験となつたことは前述の通りである。

それでは鳥谷にとって「竹内文書」の世界とはいかなるものであつた

のだろうか。鳥谷は『靈山聖地之発見』において「国体明徴には神代太古史研究を先決問題とす」として次のように述べている。⁷⁰

吾邦は卅年このかた、殊に不逞思想が瀰漫し、之が対策として国体觀念を培ふべく、政客や学者が夫れく腐心してゐるが、如何せん千数百年間の妖雲が、歴史上を蔽ふて来たのであるから、苟くも其根源を究めぬ限り、彼の未完成で而も骨抜的に削除されたと言はるゝ、古記等のみを引用し、強いて神国と天皇を讃え奉つた所で、本当に肯かれぬ節々が多々あるのを遺憾とするのである、……(中略)……畢竟今日迄の歴史上の欠陥がある為に、真に神国の本体と天津日繼の天皇の尊嚴とを知悉せぬからであつて、……(中略)……此点に就ては竹内古文獻の神代巻が真に尊いものであり、天地の草創人類の発祥、即ち神の出現より代々の皇統と御事蹟を説かれ、其本末を明かにする為には、神(カミ)より君(キミ)となり、臣(オミ)と下り民(タミ)となりし巡路や、又人民の繁殖布疋による皮膚體質を異にしたる所謂五色人の区別や、天国(アマツクニ)たる人類総統の大宗家と謂つべき神国日本の天皇は、嘗に内国に止まらずして、世界万邦を教化誘掖して統御あらせられし、其悠遠宏大なる記述が、一切明瞭にされてあるとしたなら、先づ疑惑の念を興すことなく、只管其研究と闡明に努むべきが日本臣民たる真の学者ではなからうか。

すなわち鳥谷にとつての「竹内文書」の世界とは、現今の日本の「不逞思想」を払い、「国体明徴」を行う上での「真に神国の本体と天津日繼の天皇の尊嚴」を知覚するために研究すべき「神代太古史」であつた。高井憲夫による

と鳥谷は、明治十九年(一八八六)に山岡鉄舟(一八三六〜八八)とともに「日本国教大道社」を設立した宗教家・川合清丸(一八四八〜一九一七)の思想的影響を多分に受けつつ、「古神道にもとづく皇国主義を信奉し、日本の精神的優位性や正当性を維持、拡充するためにキリストをも取り入れようとした」と、自らの「真景のふる里」たる日本の精神的優位性や正統性の確立こそが鳥谷の目指すところであつた。この点を考慮すると、鳥谷による「竹内文書」の世界への向き合い方とは、徹底した芸術家たる自己の美的世界の具現化の志向を持つものであり、戸来村に「竹内文書」の世界を「発見」したことは、鳥谷にとつてはそのことの成就であつたと言ふことができる。⁷²

こうした点からすると、二点目の十和田湖との関わりという点は、より重要な意味を持つ。前述の通り、竹内による「神都」迷ヶ平の「発見」に際し、鳥谷は十和田湖を「神都に属する神苑外苑」とみなした上で、「十和田湖はこれから唯享樂的に仇やおろそかに遊興的觀覽すべきものではない」と述べたが、鳥谷にとつて自己の美的世界の具現化たる「竹内文書」の世界は、他ならぬ十和田湖との関わりにおいてこそ実現されるべきものであつた。

十和田湖について『靈山聖地之発見』の中で鳥谷は、国立公園指定の遅れの理由として「大關係ある、十和田湖風致毀損と水利問題を説き、世人の注意を促かしたい」と、十和田湖の水利開発問題への警鐘を鳴らしている。この問題は十和田湖の北東、奥入瀬川中流域左岸にある三本木原台地(現在の十和田市中心部から六戸町、おいらせ町、三沢市にまたがる奥入瀬川中下流左岸地域)の開発と関わるものである。三本木原台地は八甲田山および十和田湖カルデラの火山灰や奥入瀬川の土砂が堆積して

できた洪積台地で、かつては不毛の地として原野が広がっていた。安政二年（一八五五）に盛岡藩・三本木新田御用掛に任命された新渡戸傳（一七九三〜一八七二）による開墾事業が着手され、近代以降、三本木町（現十和田市）の中心地域として栄えるようになる。

昭和二年（一九二七）、農林省が企図した食糧増産政策の一環により、三本木原台地は国営開墾候補地に選定され、「上北大規模開墾期成会」が設立される。⁷⁴ 開墾事業は地主の渋沢栄一、野村知三郎、盛田喜平治、三浦善蔵ら、および水野陳好、川崎新兵衛ら地元側による運動が行われ、昭和十二年より国営開墾事業が開始される。この開墾事業には、計画当初より地元住民を中心とした大規模な反対運動が展開されており、⁷⁵ 鳥谷もまた、開墾事業を進めることについて「若し夫れ天を怖れず神を信せず、我慾を通さんとするならば、例令栄爵を持つ富豪地主たりとも、天譴立どころに到るべきは炬を賭るより明らかなことである」と、⁷⁶ 十和田湖景観保全の立場より、反対運動の先頭に立つ関わりを持っていた。⁷⁷

十和田湖を初めて訪れて以来、その景観に信仰的憧憬を得た鳥谷にとって、十和田湖の景観は永遠に保全されるべきものであった。前述の通り「竹内文書」の世界を通して自己の美的世界の具現化を目指した鳥谷であるが、鳥谷にとつての具体的な「真景のふる里」とは、眼前に広がる十和田湖そのものである。鳥谷にとつて、「竹内文書」の世界を通じて戸来と十和田湖が「神都」化されることは、十和田湖を神代のベールに包んだままの状態に保全することであり、その過程で「発見」された「キリスト湧説」は、いわば副産物でしかなかったのではないかと考える。いずれにせよ、鳥谷にとつては戸来「神都」も「キリスト湧説」も、十和田湖との関連においてのみ存在するものであったのである。

三 青森県郷土史界と「神都」戸来

——もうひとつの神話の歴史化——

こうして「キリスト湧説」は世に誕生した。世に誕生するや、「キリスト湧説」は社会的に大きな反響を得る。特に「竹内文書」の信奉者の間でこの話は流布し、山根菊子『光りは東方より』（日本と世界社、一九三七年）や仲木貞一『キリストは日本人なり？ その遺跡を探る』（銀座書房、一九三九年）などにより、現在伝えられるような「キリスト湧説」が形作られていく。

一方、地元青森県では、この「キリスト湧説」や戸来「神都」説はいかに受け止められていたのだろうか。青森県郷土誌『陸奥史談』において郷土史家の葛西寛造が、昭和十年度青森県郷土史界を振り返り、県全体の郷土史界のトピックとして①青森県内における長慶天皇陵墓研究と②鳥谷による「戸来の神都説」を挙げている。⁷⁸ このうち②については「兎に角面白い研究である。唯あれ丈の資料では日本の国史を根本的に引つくり返し又世界の考古学界に再検討を要求するには不十分である」と言及するに留めており、多くを①について割いていることから、当時の青森県郷土史界の最大関心事は①長慶天皇陵墓研究であったと見ることができるといえる。

長慶天皇については、「南北朝正閏問題」以来、その即位が実在したかが焦点となっていたが、大正十五年（一九二六）十月、勅令第三二七号（「長慶天皇皇代ニ列セラレタルニ付官国幣社以下神社ニ於テ祭祀ヲ行フ」）⁷⁹ により即位の実在性が認定された。これを受けて政府では長慶天皇の陵墓の確

定が喫緊の課題となった結果、昭和十年（一九三五）六月、宮内大臣の諮問機関として「臨時陵墓調査委員会」を設置し、長慶天皇陵墓の調査および審議を開始した。⁸⁰この段階で全国二カ所の「陵墓参考地」が存在していたが、そのうちの一つが青森県中津軽郡相馬村（現弘前市）の「相馬陵墓参考地」（紙漉沢陵墓参考地）であり、また県内にはその他数カ所の「伝説箇所」⁸¹があったことから、この時期の青森県では長慶天皇陵に対する関心が高まり、それにともない青森県郷土史界でも長慶天皇陵研究が活気づく。

青森郷土会による郷土史研究雑誌『郷土誌うとう』の第七号は「長慶天皇陵研究特集号」ともいうべき内容で、岡村奇峰「長慶天皇紙漉御陵に就て」、阿保親徳「長慶天皇長谷寺御陵について」、葛西寛造「津軽地方に於ける長慶天皇の御陵墓に就て」の三本の論考のほか、資料として「長慶天皇御年表」が掲載されている。このうち阿保親徳は、青森県南部地方郷土史を研究する糠部史談会を拠点に、三戸郡向村（現南部町）の長谷寺御陵説を主張していたが、昭和十年一月に『東奥日報』紙上で「向村長谷寺御陵説より七戸長福寺御陵説へ」を掲載⁸³して上北郡七戸町の長福寺御陵説へと「転向」したことは、「同氏が過去に三戸の糠部史談会を牛耳って長谷寺説を強張して居たのを知って居る者にとっては意外に思はれた」⁸⁴と周囲を驚かせている。このことは阿保はこの時期、青森県南部地方（三戸郡および上北郡）を中心に、精力的な長慶天皇陵研究を展開していたが故の「転向」であったとも見ることができ、この時期の阿保の研究活動の一端がうかがえる。

その阿保は、鳥谷による『靈山聖地之発見』の刊行を受け、『郷土誌うとう』の一四号と一六号の二回⁸⁵にわたって、長慶天皇陵研究の立場より鳥谷の

議論の批判を展開した。以下、阿保による鳥谷批判の論旨について検討したい。第一に阿保は、鳥谷が依っている「竹内文書」について批判を行う。阿保は、山崎鐵丸による「竹内文書」批判を参照しつつ、「竹内文書」に表される後醍醐天皇および長慶天皇に関する記述を実証的に批判することにより、「歴史の上から見ると最近の第九十六代後醍醐天皇、第九十八代長慶天皇、時代即ち五六百年前の事柄さへ如上の通り其の史蹟を誤り伝へてゐるのに千数百年前の事柄は勿論何万年もの神代のことは勿論想像さへつかぬことである」⁸⁶とし、竹内や鳥谷が主張するように、神代遺跡の根拠として「竹内文書」を用いることは不可能であると⁸⁷する。第二に、阿保自らの調査研究との対照の点からの批判を行う。この点について阿保は『靈山聖地之発見』の多くの箇所を引用しながら逐一の批判を行っているが、そのうち昭和十年八月の実地調査四日目の、「竹内文書」に現れる神皇第二四代・仁々杵天皇に関連する「神都」遺跡とされた「御仙洞」の調査に関して、阿保は次のように述べている。⁸⁸

殊に私が一昨年五月（昭和九年五月―引用者注）長慶天皇御遺跡調査のために戸来村多門院跡細川岩見家の古文書を調査し其の他各地方を踏査した史料から発見した、戸来御仙洞の御遺跡が五百五十年前の長慶天皇の御遺跡と考察し、佐々木村長其他に其の見解を申上げて居つて更に調査を進めて居つた……（中略）……私の見解である五百五十年前の第九十八代長慶天皇が御讓位後に陸奥御潜幸になり御仙居された仙洞御所跡は、五万年以前の仁々杵天皇が外国から御帰りの御當時暫時御駐輦になられた御聖跡であると、竹内翁が証明されたと鳥谷氏の発表である。

この阿保の言によれば、佐々木伝次郎が竹内、鳥谷らに伝えた「此村に御仙洞と申す処があります」という「御仙洞」というのは、実は阿保の研究の結果現れた見解によるものであった。なお阿保の考察によると、長慶天皇は讓位して上皇となつて以後、陸奥国へ潜幸、南朝方の北畠氏および南部氏に依拠して戸来に一時滞在したということであり、いわば戸来村の「御仙洞」とは阿保の研究の産物であつた。竹内や鳥羽は、この阿保の研究成果を知つてか知らずか、佐々木に「御仙洞」に案内されるがまま、それを戸来「神都」の関連遺跡として位置付けたというのが、ことの真相のようである。

第三に、戸来「神都」説についてである。阿保は行論で竹内や鳥谷らによる実地調査について、「鳥谷氏や竹内巨磨翁の御陵、神蹟を発見するに早いには驚歎する」⁽⁸⁹⁾とその調査が杜撰なのを批判しつつ、「何一つとして国史に合致した事が記されていない竹内家の文書を私は信ずる気になれない」と、「竹内文書」を批判するとともに、それに依拠した鳥谷の戸来「神都」説について明確に批判を行う。たがここで注意すべきは、阿保は鳥谷による戸来「神都」説を批判しながら、もう一つの戸来「神都」説を対置するのである。すなわち戸来「饒速日命の「神都」説である。阿保はかつて自身が行つた饒速日命に関する遺跡研究を踏まえ、戸来村とその周辺地域の寺社に残る社祠の伝承や、周辺の地名より「鳥谷氏の考察の通り神代の神都を彷彿せしむる」と、戸来周辺の「神都」の存在を肯定する。そして「私は必ずや三嶽神社(戸来村)真清田神社(田子町)の縁起が神都の神代御遺跡の判明によつて国幣社に昇格の機が到来することを所信してゐる。そして又戸来、お石神の御聖地が神髓大道の発祥

地であることを所信して居る」⁽⁹⁰⁾と、鳥谷とは別の意味で戸来「神都」説を見出そうとするのである。

以上のように、阿保による鳥谷に対する批判では、「竹内文書」や竹内・鳥谷らの実地調査の成果については明確に批判をするものの、一方で自身の研究成果を敷衍する形で戸来「神都」説については(鳥谷の見解とは別の意味ではあるが)肯定をするのである。その上で阿保は次のように述べる。⁽⁹¹⁾

我が国にキリストの墓塚がなくとも国体は尊嚴で万邦無比天壤無窮の皇運に变りはない、十和田湖近くの戸来村にキリストやモーゼの墓塚がないとしても十和田湖の景色は世界唯一である。

この阿保の見解に、「竹内文書」に依拠するか否か以上に、鳥谷との大きな懸隔が見てとれる。すなわち前述の通り、鳥谷にとつて十和田湖は「竹内文書」に依拠してでも守るべき「真景のふる里」であり、戸来「神都」説や「キリスト湧説」は、いわばこつした鳥谷の觀念のもとで生み出された、ある種の副産物であつた。それに対して阿保の言う「十和田湖の景色は世界唯一」であることの根拠は「国体の尊嚴」に求められているのである。言うなれば芸術家としての美的世界という自己のなかに十和田湖を見ている鳥谷に対し、阿保の十和田湖は「国体の尊嚴」のなかにあるということである。すなわち、阿保のそれには「皇国史観」への道が準備されており、一九三〇年代を経て肥大化していく国体觀念のもと、「実証主義」と「皇国史観」とによつて彩られる戦時期日本の「歴史」の姿が立ち現れ始めているともいえるのではなからうか。鳥谷の美



図6 鳥谷がマッカーサーに贈った「衆生済度に苦悩せるキリストと其成功を祈るマリヤ図」(鳥谷『神日本とイエスキリスト』口絵図4)

的世界は、こうした地点から狙い打たれたのである。

おわりに

以上、一九三〇年代に青森県の一隅に突如として現れた「キリスト湧説」について検討してきた。鳥谷幡山という一芸術家の美的世界より生み出された戸来「神都」や「キリスト湧説」は、その鳥谷が依拠した「竹内文書」の世界によって肥大化していく一方で、「実証主義」と「皇国史観」とによる批判にさらされた。「キリスト遺言状」が公開された四ヵ月後の昭和十一年(一九三六)二月、竹内をはじめとする天津教幹部、その信奉者の知識人一五名が不敬罪によって検挙される。少なからぬ軍人や政治家にも信奉者を集めた天津教は、「国体の尊厳」の点から危険視されたのである(第二次天津教事件)。「竹内文書」の世界もまた、一九三〇年代に肥

大化する国体観念のもとで弾圧を受けることになった。⁹⁵

一方で、鳥谷の批判者となった青森県郷土史界は、「実証主義」と「皇国史観」を携えて、「郷土―国家主義」とも呼ぶべき、戦時期青森県の地域ファシズムを支える思想を生み出す母体となっていく。⁹⁴ 戸来「神都」と「キリスト湧説」を生み出した鳥谷の美的世界は、こうした時代の陥穽へと陥っていく。昭和二十年(一九四五)五月二十五日、東京の山の手空襲で妻を失った鳥谷は、戦後、妻の「霊告」を受けてマッカーサーに対して次の文章とともに自筆の絵画を贈る(図6)。

親愛なるマッカーサー元帥閣下、仄かに承わりますに閣下御夫妻は疾に基督教信奉者に在らせらるゝ由欣幸に堪えませんが、就ては卒直に申し上げますが閣下は今迄欧米諸国の如く勝誇った考えで吾日本に対し殖民地政策ではイケマセン、之は取りも直さず神の思召に叶いません、閣下が真に基督教信奉者に在らせらるゝならば、茲にキリストの心を以て心とせられ敗戦日本国に臨むに凡てを一視同仁的に処理されたい、スルト閣下の徳が国の内外に知れ神の思召に叶うのであり世は平穩に帰するのであります云々。

「真景のふる里」であった敗戦国・日本にもはやキリストは再臨せず、鳥谷はマッカーサーの「キリストの心」にすがりしか術はなかったのである。

こうして鳥谷が「真景のふる里」とした日本の姿は、敗戦によって灰

燼に帰した。鳥谷が依拠した「竹内文書」の世界も、また鳥谷の批判者となった「皇国史観」も、敗戦によって消え失せた。残ったのは本来の意味を喪失し、好事家たちの世界の中のみ生きる「竹内文書」と、鳥谷の美的世界から遊離し、そして「竹内文書」の世界までも失った「キリストの墓」のみである。その「キリストの墓」は、今なお山間の小村に多くの観光客を引き寄せる「観光スポット」として存在している。いわば鳥谷を招聘し、戸来村の地域振興を構想した佐々木伝次郎の理念のみが現代に生きていると言えよう。

戸来「神都」と「キリスト湧説」という神話の歴史化の試みは失敗し、「神秘の村」という観光地が残されたのである。

注

- (1) 『新郷村史』新郷村、一九八九年、二〇三頁。
- (2) 『別冊歴史読本五四号 危険な歴史書「古史古伝」』新人物往来社、二〇〇〇年、三四頁。
- (3) 前掲注1、五五三頁。
- (4) 伊藤武彦『国立公園法解説』国立公園協会、一九三一年、二六頁。
- (5) 『国立公園候補地調査概要』内務省衛生局、一九三〇年。なおこの際に候補地とされたのは、阿寒、登別、大沼（北海道）、十和田（青森・秋田）、磐梯及吾妻（福島）、日光（栃木）、富士（山梨・静岡）、上高地、白馬（長野）、立山（富山）、大台ヶ原及大峰山（奈良・三重）、大山（鳥取）、屋島及小豆島（香川）、阿蘇（熊本）、雲仙（長崎）、霧島（宮崎・鹿児島）の一六カ所である。
- (6) 上原敬二『国立公園の話』新光社、一九三三年、一〇四頁。
- (7) 大町桂月『行雲流水』博文館、一九〇九年、一三〇頁。

- (8) 『青森県史 資料編 近現代四』青森県、二〇〇五年、資料三四一。
- (9) 『青森県史 資料編 近現代三』青森県、二〇〇四年、資料六一六。
- (10) 前掲注8、資料三一〇。
- (11) 前掲注8、資料三二四。
- (12) 前掲注8、資料三一六。
- (13) 前掲注8、資料三二七。
- (14) 前掲注8、資料三三一。
- (15) 前掲注1、三六〇～三六二頁。
- (16) 前掲注7、一二九～一三〇頁。
- (17) 前掲注1、三七七頁。
- (18) 鳥谷幡山の経歴については、高井憲夫『美神逸脱 草莽の画家鳥谷幡山』私家版、二〇〇六年を参照。
- (19) 前掲注18、一四頁。
- (20) 鳥谷幡山『十和田湖を中心に神代史蹟たる霊山聖地之発見と竹内古文獻実証踏査に就て併せて猶太聖者イエスキリストの天国（アマツクニ）たる吾邦に渡来隠棲の事蹟を述ぶ』新古美術社、一九三六年、一頁。
- (21) 前掲注18、五一頁。
- (22) 東京漫画会は大正四年六月に、主に新聞社所屬の漫画家たちにより結成された日本初の漫画家集団である（鈴木麻記「大正期における漫画の両義性と社会的布置——漫画家集団『東京漫画会』を事例として」『マス・コミュニケーション・研究』八八、二〇一六年）。
- (23) 前掲注8、資料三四三。
- (24) 前掲注1、五〇頁。
- (25) 前掲注20、一頁。
- (26) 前掲注20、一頁。
- (27) 「古史古伝」とは古事記・日本書紀以前の歴史が記されていると称する文献

- の総称として扱われ、記紀などで神話として扱われる神話を歴史として記すことに特徴を持つ(原田実『古史古伝』研究の現状と展望)前掲注2「危険な歴史書『古史古伝』」。なお近年、「古史古伝」の学術用語としての利用の難しさから、それに代えて「近代偽撰国史」、「近代の偽書」、「近代の偽国史」などの名称も提起されている。詳細については長谷川亮一「近現代日本における偽作史書とその受容を考えるために——藤原明氏の近業に接して」『史苑』八一巻二号、二〇二二年を参照。
- (28) 山崎鐵丸「竹内家記録に就いて」『國學院雜誌』三三巻八号、一九二七年。
- (29) 狩野亨吉「天津教古文書の批判」『思想』一六九号、一九三六年。
- (30) たとえば『偽書が生んだ異端の日本史』メディアソフト、二〇二〇年では、同じく青森県を舞台とする「古史古伝」である「東日流外三郡史」とともに「竹内文書」は巻頭に掲載されるなど大きく取り扱われている。
- (31) 主なものとしては藤原明『日本の偽書』文藝春秋社、二〇〇四年、藤原明『幻影の偽書』竹内文書と竹内巨磨——超国家主義の妖怪』河出書房新社、二〇二〇年、また「竹内文書」の成立・展開に大きな影響を与えた酒井勝軍については久米晶文『異端』の伝道者酒井勝軍』学研パブリッシング、二〇一二年および相沢源七「酒井勝軍の『神州天子国』論について——その日猶主義を中心として」(上)『東北文化研究所紀要』一五号、一九八四年、(中)『東北文化研究所紀要』一七号、一九八五年、(下の二)『東北文化研究所紀要』一九号、一九八七年、(下の三)『東北文化研究所紀要』二二号、一九八九年など。
- (32) 前掲注20、一頁。
- (33) 前掲注1、二九一頁。なお同村の西越三嶽神社の記録でも「高地に大石の見事に積み重なりて自ら奇観を呈し上大石上、下大石上という霊所あり」とされている(同二九九頁)。
- (34) 前掲注1、三六〇頁。

- (35) 『東奥日報』一九三五年五月二十日付夕刊「太古戸来の神都と諸外国民族との関係(上)」、『東奥日報』一九三五年五月二十一日付夕刊「太古戸来の神都と諸外国民族との関係(中)」、『東奥日報』一九三五年五月二十三日付夕刊「太古戸来の神都と諸外国民族との関係(下)」。
- (36) 『大阪毎日新聞』一九三四年十月六日付「世界最古の文化国スメリアは我等の祖先? 神武天皇御東遷記念祭の折柄 在米川守田博士の新研究」。川守田は日本人とイスラエル人を共通祖先とみなすいわゆる「日猶同祖論」の立場に立つが、一方で自らの研究と「キリストの墓」とを関連付ける点については「私はそれについて何等の関係もなく、責任も負わざる者である」と明確に拒否している(川守田英二『日本へブル詩歌の研究(上巻)』日本へブル詩歌出版委員会、一九五六年、八頁)。
- (37) 前掲注20『靈山聖地之発見』をもとに「神都」实地調査の行程を復元する理由は、同書が「キリストの墓」の「発見」に際して時期的に最も近い段階で記されていること、および実際に調査に参加した鳥谷による執筆によるものである理由からである。叙述には多分に鳥谷の主観が入っている部分も見受けられるものの、その行程については概ね正確であると判断し、あえて利用する。
- (38) 前掲注20、一三頁。
- (39) 前掲注20、一三頁。
- (40) 前掲注20、一三〜一四頁。
- (41) 前掲注20、一四頁。
- (42) 前掲注20『靈山聖地之発見』の記述に見られる鳥谷の主観的記述からは、この鳥谷のインスピレーションが現地で实地調査の現場でなされたものなのか、それとも後述のように後日「竹内文書」のなかに「キリスト遺言書」が「発見」されたことを受けてのインスピレーション、記述なのかを確定することは困難である。しかしながら、後述する鳥谷による「キリスト上陸地」

の「発見」の過程を考慮すれば、ここでの記述の前後関係は、ある程度信用するに足るものであると考える。

(43) 前掲注20、一四〇一五頁。

(44) 「葺不合朝（ウガヤフキアエズ朝）」とは「古史古伝」に登場する神武天皇以前に存在したとされる王朝であり、「竹内文書」のほかに「上記（ウエツフミ）」や「宮下文書」、「神代上代天皇記」などにも登場する。三七代の松照彦天皇について「竹内文書」では、「天空浮舟」によって万国巡幸を行ったとされ、「天皇即位百七十二年ケサリ月立十日、ヨモツ国ロシアフクニリガ水門奥戸来山宮臨幸、仙洞トナス」、また「天皇即位三百九十九年ケサリ月立二日、五百二歳神幽マセル、五戸葬ル」と、戸来や五戸と関連付けて記載されている（武田崇元編『定本竹内文獻』八幡書店、一九八四年）。

(45) 前掲注20、一五頁。

(46) 湖山荘は鳥谷が、友人の藤嶋百人（菘園）とともに建設した画房であるが、高井憲夫はその建設時期を昭和十一年（一九三六）としている（前掲注18、五一頁）。一方で『霊山聖地之発見』で鳥谷は湖山荘の建設を「昨年」、すなわち昭和九年のこととしており（前掲注20、二〇頁）、詳細は不明である。

(47) 前掲注20、二〇頁。

(48) 前掲注20、二二〇二三頁。

(49) 酒井勝軍『太古日本のピラミッド』国教宣明団、一九三四年。なお後述の様には、この時の酒井による葦嶽山実地調査に、鳥谷も同行している。

(50) 前掲注20、二三頁。

(51) 前掲注20、二四〇二五頁。

(52) 前掲注20、二六頁。

(53) 前掲注20、二七頁。

(54) 「見計」は「日計」（八戸市日計^{ひばかり}）の誤記と思われる。

(55) 前掲注20、二七頁。

(56) 前掲注20、二七〇二八頁。

(57) なお、八戸市石室三丁目にある貝鞍稲荷神社には、現在も鳥居の脇に「伝・キリスト日本上陸最初の宿泊地（二ヶ月有余滞在地）」と書かれた、郷土史家・江刺家均による案内板が建てられている。

(58) 前掲注20、二九頁。

(59) この点については、高井憲夫も「戸来キリスト伝承は、幡山の畏友高田集蔵の証言にみられるように、幡山の頭脳が生み出したものであった。竹内をはじめ酒井等は、いわばその創作の介添人であり、キリスト伝承を記している」とされた竹内文書は、偽りを正当化するための物証であった。また後に、キリスト伝承を世に紹介したとされる山根菊子は、盗作者にすぎなかった」と、鳥谷の主導性を指摘している（前掲注18、五三頁）。

(60) 前掲注20『霊山聖地之発見』によると、鳥谷は竹内招聘の事情を次のように述べる。「余は神都とピラミットを一昨年秋十月に発見……（中略）……」

処が此事たるや郷土に関する許りでなく、国家的大問題であり、一人の単なる発見位に放置し措く訳に往かぬと言ふので、郷土の有志方が昨夏八月上旬に、予て尊崇措かざる、御神宝と古文獻の秘蔵家たる竹内巨磨翁を促かし、其古文獻と対照しての史蹟探求となつたのである」（一一頁）とある。一方、同じく鳥谷による『神日本とイエスキリスト』（私家版、一九六三年、二二頁）では、「（一九三四年の「お石神」調査に際して——引用者注）曾って先輩酒井勝軍氏が発見に係る広島県備後国なるピラミッドを見た予備知識あるのを幸いに中腹に在る磐境を究め方位石（東西南北）や倒れてある大磐石を奇蹟としたが、此等を単独に究むるよりは寧ろ明春の雪融を待つて酒井氏を主班として再調査すべきを約束したのであった。然し酒井氏は当時病褥にあることから古文獻所蔵の竹内翁を促がして故中川原元代議士や鍼灸家沢田健氏と共に再調査に來たのである」と相違がある。恐らくは鳥谷の調査発表の裏付けのため、鳥谷と地元関係者により酒井勝軍

の招聘が企図されたが、病床の酒井を招聘することがかなわず、代わって竹内が招聘されたものであろうと推測される。しかしながら一方で同書の別の頁では、「昭和八年十月茨城県磯原に小社を祀つてある竹内巨磨翁から、突然老生の郷土地方八戸と戸来に歴史的探究をするから同行せよとの懇請であった。著者は之に尠からず不純の動機があると考えて最初之を拒絶したのである。ダが再三再四請わるので私情を棄て、応諾して同行することにした」(四三頁)と、竹内の側が鳥谷を調査に誘い、鳥谷はそれを再三再四拒絶しているとするのである。この記述の矛盾について、藤原明は「鳥谷の記憶の混乱に起因するもの」だとするが(前掲注31 藤原二〇二〇、一〇六頁)、詳細は不明である。後述するように後日、鳥谷が「キリスト湧説」をめぐって竹内らに対して抱いたある種の悪感情が、この記憶の混乱を生じさせた要因ではないかとも推測する。

(61)

前掲注20、一八頁。

(62)

無論、この「キリスト遺言状」についても、他の「竹内文書」同様、竹内による偽作であると推測される。

(63)

前掲注20、四〇〜四四頁。

(64)

山根菊子『光りは東方より』日本と世界社、一九三七年(のち八幡書店、一九八五年として復刊) 一二二〜一二三頁。

(65)

前掲注60『神日本とイエスキリスト』、二三頁

(66)

前掲注60『神日本とイエスキリスト』、四六頁。なおこの引用部分について山根菊子等を指していると判断したのは、山根『光りは東方より』の序言が「戸隠山神域」にて書かれていること、また山根による「キリスト湧説」の二冊目の著書が『キリストは日本で死んでいる』平和世界社、一九五八年であることから、ここで鳥谷は竹内とともに山根を批判しているものと考えた。

(67)

前掲注31 藤原二〇二〇、七二〜七三頁。なおこの際に酒井とともに「神宝」の拝観に同行したのは、鳥谷のほか長谷川栄作(彫刻家)、中山忠成(漢

方医)・忠直親子、有賀成可(弁護士)らであった。

(68)

前掲注35『東奥日報』一九三五年五月二日付夕刊。

(69)

この実地調査は、情報漏洩や調査妨害を恐れた酒井により極秘裏に進められたが、地元の協力者である田邊快三とともに鳥谷は唯一同行者として認められている(前掲注49、三四頁)。なお酒井『太古日本のピラミッド』の口絵には、鳥谷によつて描かれた葦嶽山ピラミッドの絵(「ピラミッドの正面」)「方位石とピラミッド」「鏡石」の三葉が掲載されており、あるいは記録係としての同行であったとも考えられる。

(70)

前掲注20、二九〜三〇頁。

(71)

前掲注18、六三頁。

(72)

この点を考えると、藤原明が指摘するような、酒井勝軍が「キリストの墓」に対して冷淡ともいえる態度をとつたという点について新たな知見が得られる。藤原は、久米晶文による「思想家としての酒井の眼には、キリスト日本渡来説そのものが単純で子どもっぽいものと映じていたのかもしれない」との指摘を「最も正鶴を得た所見」であると指摘する(前掲注31 藤原二〇二〇、一〇八頁)。酒井からすると「子どもっぽい」と映つた鳥谷の「キリスト湧説」への関りが、鳥谷の美的世界的感覚に起因するものであったとするならば、それは酒井の思想的営為とは相容れないものであったが故に、酒井にはそれを受け入れることができなかつたと解釈することも可能であろう。

(73)

前掲注20、三八頁。

(74)

前掲注8、資料三三二。

(75)

前掲注8、資料三三八。

(76)

前掲注20、三九頁。

(77)

前掲注18、五一頁。

(78)

葛西寛造「二五九六年県下郷土史界の展望」『陸奥史談』四号、一九三六年。

(79) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:A03021624300、御署名原本・大正十五年・勅令第三二七号・長慶天皇皇代二列セラレタルニ付官国幣社

以下神社ニ於テ行フヘキ祭祀ニ関スル件 (国立公文書館)。

(80) 臨時陵墓調査委員会については、外池昇の一連の研究 (外池昇「臨時陵墓調査委員会による長慶天皇陵の調査」設置から『伝説箇所』の審議まで)、『日本常民文化紀要』二九号、二〇二二年、外池昇「臨時陵墓調査委員会における長慶天皇陵治定への道程」七点の『答申案』—小澤正人編『歴史認識のグローバル研究』成城大学グローバル研究センター、二〇一六年、外池昇「長慶天皇陵と『擬陵』—臨時陵墓調査委員会による『調査』『審議』から宮内大臣と総理大臣・枢密院議長の『会見』まで」、『日本常民文化紀要』三二号、二〇一七年、外池昇「長慶天皇陵の治定と『擬陵』—臨時陵墓調査委員会録」の検討から—『東洋文化』一一四号、二〇一七年、外池昇「臨時陵墓調査委員会による長慶天皇陵の『調査』『審議』—第一回・第二回総会より—」、『日本常民文化紀要』三四号、二〇一九年、外池昇「臨時陵墓調査委員会による長慶天皇陵『傳説箇所』の『調査』『審議』—総会・小委員会の『議事録』『速記録』より」、『日本常民文化紀要』三三三号、二〇二〇年を参照。

(81) 臨時陵墓調査委員会で示された伝説箇所のうち、青森県内には相馬陵墓参考地を含めて一〇カ所の「伝説箇所」が存在するとされている。しかし、相馬陵墓参考地以外は全て第一類 (牽強付会ノ説ヲ為スモノ又ハ偽物偽文書ヲ以テ証拠トナルモノ) もしくは第二類 (伝説・地名ヲ存スルモノノ内容ヲ詳ニセサルモノ) に分類されている (前掲注80 外池二〇一九の表一参照)。

(82) 『郷土誌うとう』七号、一九三四年。

(83) 『東奥日報』一九三五年一月一日付夕刊「向村長谷寺御陵説より七戸長福寺御陵説へ(一)」。以後、一九日まで五回連載。

(84) 前掲注78。

(85) 阿保親徳「茨城県磯原町竹内家古文獻に依る鳥谷幡山氏発表の十和田湖戸来、八戸地方の神代御遺蹟の批判」、『郷土誌うとう』一四号、一九三六年、阿保親徳「茨城県磯原町竹内家古文獻に依る鳥谷幡山氏発表の十和田湖戸来、八戸地方の神代御遺蹟の批判」、『郷土誌うとう』一六号、一九三六年。

(86) 前掲注85『郷土誌うとう』一六号、三四頁。

(87) ただし阿保は、「竹内文書」の創作年代を「大日本史編纂の頃元禄時代(二百四十年前)以後、大日本史の出版された嘉永(八十余年前)の頃何人か史学に通じていない人が記されたものであると見られる」とし、竹内巨磨自身の「偽作」の可能性については触れていない。

(88) 前掲注85『郷土誌うとう』一六号、三一頁。

(89) 前掲注85『郷土誌うとう』一六号、二九頁。

(90) 前掲注85『郷土誌うとう』一六号、三一頁。

(91) 前掲注85『郷土誌うとう』一六号、二七〜二八頁。

(92) 前掲注85『郷土誌うとう』一六号、三三頁。

(93) 第二次天津教事件後、磯原にあった「竹内文書」は押収され、信奉者たちによる「太古史」研究は危機を迎える。「史料」に依拠することができない「竹内文書」の信奉者たちは、「神おろし」を用いて「竹内文書」の世界的追求を試みることで、その難を乗り切ろうとした。また全国各地で天津教の外郭団体とみなされる「研究会」の創設が相次ぎ、また昭和十七年四月には、陸軍中将中島今朝吾が中心となって、「竹内文書」の世界に立脚した国策提唱機関「皇道世界政治研究所」が設立されている (前掲注31 藤原二〇二〇、一一二〜一二六頁)。

(94) 川内淳史「地域医療と『ファシズム』——戦時期津軽地方の『国家』と『郷土』」

浪川健治、デビッド・ハウエル、河西英通編『周辺史から全体史へ——地域と文化』清文堂出版、二〇〇九年。

(95) 前掲注60、一五頁

著者プロフィール

川内淳史（かわうち・あつし） 昭和五十五年（一九八〇）青森県生まれ。

関西学院大学大学院文学研究科文化歴史学専攻博士課程後期課程修了、博士（歴史学）。
現在、東北大学災害科学国際研究所歴史文化遺産保全学分野 准教授、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク事務局長。

共編著…『阪神・淡路大震災像の形成と受容―震災資料の可能性―』岩田書院、平成二十三年。『「生存」の東北史―歴史から問う三・一一―』大月書店、平成二十五年。『「生存」の歴史と復興の現在―三・一一 分断をつなぎ直す―』大月書店、平成三十一年。『COVID―一九の下で、記録に向きあう―博物館、史料レスキュー活動と現状の記録―』東北大学災害科学国際研究所歴史文化遺産保全学分野、令和四年。

主な論文…『戦時期地域医療の経験―『健康青森県』の成立と転回―』浪川健治ほか編『地域ネットワークと社会変容―創造される歴史像―』岩田書院、平成二十年。『地域医療と『ファシズム』―戦時期津軽地方の『国家』と『郷土』―』浪川健治ほか編『周辺から全体史へ―地域と文化―』清文堂、平成二十一年。『広区域単営医療組合の存立形態と地域社会―青森市・東青病院を中心に―』『大原社会問題研究所雑誌』六三〇号、平成二十三年。『戦後『国民皆保険』の形成と地方自治―三重県伊賀地域を事例に―』『ヒストリア』二四七号、平成二十六年など。